スクールカウンセラーの発達支援に関する実証的研究

～スクールカウンセリングに関する発達臨床心理学的アプローチ～

The Evidenced Based Study on Developmental Support by School Counselor
～ Developmental and Clinical Psychological Approach
on School Counseling Program ～

千原美重子*
Mieko CHIHARA

はじめに

平成７年度からスクールカウンセラー派遣調査活用研究事業が開始し、公立の小・中・高等学校にスクールカウンセラーが派遣され、現在まで継続してきた。筆者は平成８年から16年間、発達臨床心理学の立場からスクールカウンセリングに関わってきた。まったく新しい領域に多くの方々がスクールカウンセラーとして児童生徒の発達支援に従事している。スクールカウンセラーが、学校の中にいて専門職として、外部性を保ちながら教育現場でのニーズに合わせて、柔軟に働くことは、戦後行われた大きな教育改革の一つと言える。

今回、奈良大学の研究助成をいただき、「スクールカウンセラーの発達支援に関する実証的研究～スクールカウンセリングに関する発達臨床心理学的アプローチ～」というテーマで研究することができた。スクールカウンセリングは、今までの心理臨床のパラダイムを変換するものであり、今までの研究方法ではなく、スクールカウンセリング独自の研究方法を検討しなければならないことが、今までの研究の中で証明されてきた。

カウンセリングはもともとクリニックやカウンセリングセンターなどで行われ、治療的色彩の濃いものであった。学校という教育の現場に、クリニック的なカウンセリングを導入しても効果は上がらず、むしろトラブルが生じてきたことが多い。そのことが、平成７年度以前には、なかなか学校にカウンセリングが根付かなかった一因でもあるといわれてきた。

教育は人格の完成を目指し、カウンセリングは人格の成長を援助するものである。教育は日常的な営みであり、カウンセリングは非日常的な営みであるが、両者には本質的な部分で相補的なものがあると思われる。

カウンセリングの人格の成長を重視する立場は、第一に学校教育における教科中心主義から、

2011年９月９日受理　*社会学部心理学科教授

人間中心の教育へと転換を迫るものである。

第二にカウンセリングはクライエントの自発的な自己実現を援助するという考えは、教師中心主義から、生徒中心主義、すなわち生徒が自ら生き生きと学び、学ぶことに喜びを見出していける教育へもっていかなければならない、ということを強調するものである。

第三に、教育が集団中心から個人中心へと変化すべきだという方向性を示唆したことである。学級の構成員である個々の生徒と相互に人間的な信頼関係を樹立することの重要性を指摘したものである。

これからもスクールカウンセリングが、教育活動にとって不可欠なものとして根付くためには、スクールカウンセリングの構造を俯瞰しながら、個々の活動を丁寧に分析し、スクールカウンセラー自身が活動の自己評価をし、実践していく必要がある。

今回、研究助成による研究は、第３部にまとめて発表してきた。したがって、今回の総合研究所初報には概要として、３つに分けて述べたい。

第１に、学校臨床心理士（スクールカウンセラー）による保護者支援に関する研究について論じ、次にスクールカウンセリングの構造に関するスタンダード作成の試み、最後に地域文化とスクールカウンセリングについてそれぞれの研究の概要について述べる。

１）研究Ⅰ　学校臨床心理士（スクールカウンセラー：以降SCと略す）による保護者支援についての研究

この研究結果は、「保護者支援の学校コミュニティへの支援と展開のプロセス」と題して日本心理臨床学会第29回大会で自主シンポジウムを企画し、発表をした（2010）。さらにそのシンポジウムの結果にいついて、話題提供、指定討論、質疑応答の内容をまとめて報告書として発表した（2011）。その概要について述べる。

SCは、児童や生徒の保護者と面接をし、児童生徒の発達を支援することが多い。スクールカウンセリングの中で、SCが保護者とどのように対応するのかは、非常に重要な問題である。特に、思春期の不登校や引きこもりがちの生徒の場合、発達障害が背景にある児童生徒の場合は、とくに保護者面接が主要な支援になる場合がある。学校に対して否定的な保護者の場合でも、カウンセリングの過程で担任へのコンサルテーションを行うことによって、担任と保護者をつなぐことができ、別室登校や教室復帰につながる例が多い。教室復帰につながらない場合でも、進路を自己決定して行くことを担任や保護者と共の見守り、適応指導教室や専門学校、高校、大学、就職への道が開かれることがある。

様々な危機的状態は、発達の分岐点でもある。この分岐点を様々な支援者の連携により、発達のために良いチャンスに変えていくための方略を模索することが重要である。そのためには保護者支援は、非常に有効な方法であることを研究した。

保護者支援員の有効性に関しては、話題提供者とともに発表を行い、支援の方略について検討した。保護者支援員の３つの役割として、学校と保護者をつなぐ役割、トラブルに介入する役割、ケース検討会で学校体制を変える役割という提案がなされた。また、具体的な役割として、学校

における緊急事態および葛藤状況でいかに健康的な方向に持っていく支援をするか、ということが話題提供であげられた。さらに、援助要請行動の段階性、内部性のSCと、外部性の保護者支援員の役割、保護者支援員の役割の継続性があげられた。2カ年間の保護者支援制度の総括であったが、これからSCが学校で活動する場合、保護者支援の立場、役割の重要性は今後ますます大きくなるのではないかと思う。保護者支援は、担任も、スクールソーシャルワーカーや、その他外部の支援者も当然することには違いないが、スクールカウンセラーが心理臨床の専門家として重要な任務を持ったことは非常に大きいことである。どのように担っていくかという問題は今後、極めて重要な課題である。今後とも保護者支援の在り方について、事例をあげて研究すべきテーマであることを指摘した。

2）研究Ⅱ　スクールカウンセリングの構造に関するスタンダード作成の試み

この研究結果については、奈良大学研究紀要（2011）、ならびに、日本心理臨床学会第30回大会（2011）に発表している。その研究結果の概要は次のとおりである。

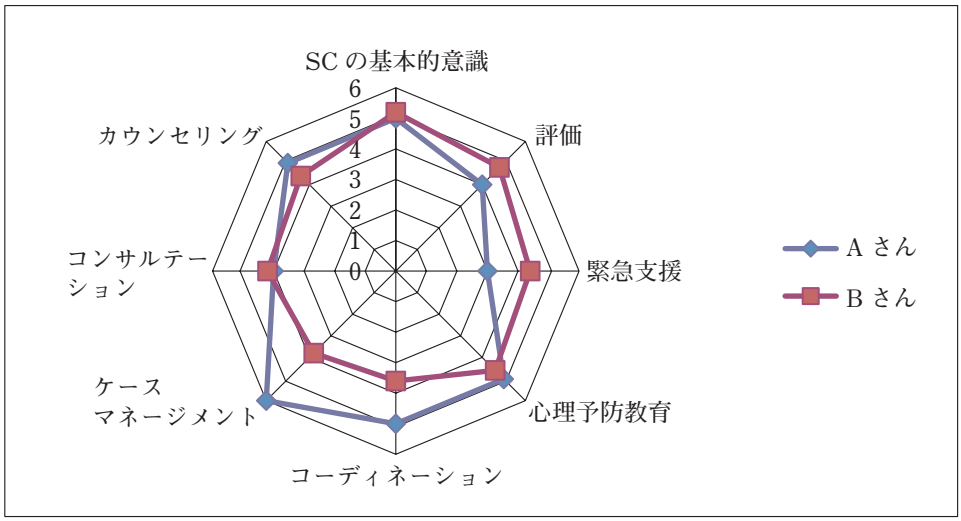
スクールカウンセリングは、対象も、児童生徒、教師、保護者、地域住民のように多様に異なり、発達的な段階も幼児から児童、思春期、青年期、若い成人、中年期、高齢者まで幅があり、主訴も異なり、カウンセリングの目標も異なるので、SCを学校現場に導入する際には、あえてマニュアルを作成されてこなかった。学校現場での主訴は、不登校、いじめ、非行・問題行動、発達障害、拒食、自傷行為、自殺企図、虐待、家庭問題、友人関係、学業不振、統合失調症、鬱、複合的な主訴など、非常に多様である。このことは、安易にマニュアルどおりにすれば誰でもできるという誤解を避けるためには非常に効果的だったと言える。この点についてSC活動の当初においては有効であったと思われる。

しかし、平成7（1995）年にSCが学校に派遣されて、今年度で17年目である。アメリカでは、1990年にアメリカスクールカウンセリングプログラムナショナルスタンダードが発表されている。日本でも相当量の研究も積み重ねられており、スタンダードのプログラムが作成されるべきだと感じた。

研究方法は、筆者が実施した今までの研究に基づき、SC活動のスタンダードを構築することを目的にした。千原（2008）は、SCの活動について、生徒・保護者の面接、教師や地域へのコンサルテーション、生徒指導や教育相談、特別支援教育部会との連携、広報活動、緊急支援活動、SCとしての資質向上（研究、SV）活動、を抽出し図示した。これを基にしてSCの活動のプロフィールを描くことを提案した（千原、2011）。

さらに、質問紙を作成し、その結果を8角形のレーダーチャートを用いて各自の活動をプロットできる方法を提案した。8つの基本的要素として、SCの基本的意識、カウンセリング、コンサルテーション、ケースマネージメント、コーディネーション、心理予防教育、緊急支援、評価である。

8つの基本要素は、①SCとしての基本意識、（人権意識、心身の健康配慮、インフォームド・コンセント、守秘義務、自己研鑽、学校文化への配慮）、②カウンセリング・面接（生徒・保護



図Ⅰ　スクールカウンセリングの基本的構造（2 事例）の図示

者の面接、小集団面接、面接記録の保存、スーパーヴィジョン、事例発表)、③コンサルテーション（管理職、教師、保護者、福祉機関、行政機関)、④ケース・マネージメント（ケース会議、関係機関の調整、フォロー・アップ、ベース・シートの作成、社会資源、次回会議の設定)、⑤コーディネーション･リエゾン（コーディネーター、教師、生徒会、保護者会、地域、関係機関)、⑥心理予防教育（準備、提案、授業、必要性、研修、要請)、⑦緊急支援（敏感性、要請、参画、研修、準備、実施)、⑧評価（カウンセリング、コンサルテーション、ケースマネージメント、コーディネーション、心理予防教育、緊急支援）である。

図１は２人のSCの結果である（図１参照)。

考察として、図示することの意義について述べる。まず第１に、SC活動の構造の提示ができ、SC相互にその活動を同定できることである。第２に、SC自身が自己の活動のスタイルを確認できることである。事例Ａでは、ケースマネージメント、コーディネーションが特徴的といえる。事例Ｂでは、緊急支援活動、自己評価が高いことが特徴的である。第３には、特徴的分野と、そうでない分野を確認することができ、今後SC活動に幅が拡大できるヒントが生まれる。第４に、プロフィールから学校のニーズや特徴、文化を知ることができる。第５に、このプロフィールはSCの善し悪しを見るものでないことは重要な視点である。学校も一つのクライエントであり、その支援のニーズは異なることを認識しながら、SCの構造という大枠から絶えず自己を点検することが重要である。

今後の課題としては、基本的要素の見直しが必要である。さらに、質問項目の精査をすることである。現在は48の質問項目を実施しているが、さらに検討を加えたい。

SC活動の構造に関するスタンダードの作成は、効果的なSC活動の手段であり、SCとしての実践の視座からは、基本的要素について丁寧に実践し、詳細な研究・分析が今後とも必要である。

研究Ⅱは、スクールカウンセリングプログラムのスタンダード作成をすることであり、スクールカウンセリングの構造を構築すると同時に、それによって自己の活動を自分自身で評価するこ

とに重点を置いている。今後ともプログラムのスタンダードの作成については修正し、より利用しやすいものにしていく研究が必要である。

3）研究Ⅲ　地域文化とスクールカウンセリング
～心理臨床におけるパラダイムの変換～

この研究の成果は、第15回学校臨床心理士全国研修会参加者企画シンポジウムにて、「地域の文化に根ざしたスクールカウンセリングのあり方の検討－学校コミュニティの文化が背後に感じられる事例から－」というテーマを企画・実施した（2010）。また、地域文化を重視してスクールカウンセリングを行う必要性については、「地域文化とスクールカウンセリング」というテーマで「子どもの心と学校臨床」第５号（2011）で論じた。この研究の概要について以下に述べる。

SCが導入されるまでは、心理的支援はクライエントとの１対１の関係を中心とした面接内の面接が中心に考えられていた。ところがSC活動は、今まで教師によって占められていた学校という他領域に入り、その文化や精神的風土になじむこと、次に、個々の児童生徒を見ながら、家族への援助、学校という組織体や学校をめぐるコミュニティへの援助が大切である。さらに、時間や場所を特定して相談室内で予定に添って事を運ぶことではなく、臨機応変な対応や、危機介入や、学校コミュニティを視野に入れた情報判断力など今まで心理臨床に求められなかった能力が求められるようになった。

そういう意味でSC活動は、心理臨床のパラダイムの転換を行うものである。

学校取り巻くコミュニティとして、家族を含む地域社会がある。さらに、現在はそこを地図にないコミュニティが取り巻いている。インターネット情報、ネットフレンド、マスコミから流される膨大な情報、などが含まれる。その外を町・市・県などの行政区があり、その外を国という行政区があり、学校はこの５層の入れ物の中にある。学校コミュニティは、学校という内からと、国という外枠から、またその中にあるいずれからも相互に影響を受けて、長い目で見れば、変化、発達するという可能性をもつものである。近年は地図にないコミュニティの影響が大きくなっている。

地域文化を見立てる場合、その地方の立地条件、人口、職業分布、年齢構成、地域住民の出身地、まつり、歴史、公共機関、学校概要、面接、などの多様な観点から情報を集め、学校文化の見立てをすることがSCにとって重要である。また、ケース会議で用いるベースシートには、３世代ぐらいのジェノグラム（家族構成図）、またはクライエントを取り巻く人や関係機関等を空間的に視覚化したエコマップ（生態地図）を描くことでその地域文化が浮かぶことを指摘した。

以上、３つに分けて、学会での研究発表、論文発表について挙げ、研究内容について概観した。今後ともスクールカウンセラーの発達支援の研究、スクールカウンセリングのスタンダードな構造について研究し、学校臨床の場で有効に活用できるものに精査していきたいと思っている。

付記

本研究は平成22年度奈良大学研究助成を受けて実施した。調査に協力いただいた臨床心理士、並びに、関係機関の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

千原美重子（2011）スクールカウンセリングの構造に関するスタンダード作成の試み（Ⅱ）―調査研究結果から基本成分のレーダーチャートによる図示―日本心理臨床学会　30, 295

千原美重子（2011）地域文化とスクールカウンセリング、子どもの心と学校臨床、遠見書房 5、11－19

千原美重子（2011）スクールカウンセリングの構造に関するスタンダードの作成の試み（1）奈良大学紀要、39, 37－46

千原美重子（2011）子どもを盗られる不安を抱く母親の事例－拒食・チック症状・人間関係の不信感に関わる問題をもつ子どもたち－奈良大学臨床心理クリニック紀要、3、Ⅰ－6

千原美重子ほか（2010）保護者支援員の学校コミュニティへの支援と展開のプロセスについて、日本心理臨床学会、29、610

千原美重子ほか（2010）第15回学校臨床心理士全国研修会参加者企画シンポジウム「地域の文化に根ざしたスクールカウンセリングのあり方の検討－学校コミュニティの文化が背景に感じられる事例から－」昭和女子大学

Campbell,C&Dahir,C.A中野良顕訳（2000）スクールカウンセリングスタンダード－ アメリカのスクールカウンセリングプログラム国家基準　図書文化

千原美重子（2010）学校臨床心理士の発達支援に関する研究－活動内容、連携、緊急支援についての分析－奈良大学紀要、38、127-136

千原美重子（2010）中年期の発達的危機・再考～人生の転換期を物語ることの意味～奈良大学臨床心理クリニック紀要、2, 1－6

千原美重子（2009）学校臨床心理士に求められる地域臨床の視点に関する研究（1）－緊急支援におけるPTSDの変化の要因について－奈良大学研究年報、14、Ⅰ－8

千原美重子（2008）学校教育における心の問題への対応（Ⅲ）－学校臨床心理士の活動における効果的活動の分析－総合研究所所報、16, 29－39

千原美重子（2008）カウンセリングスキルを考慮した授業づくりに関する実証的研究―コミュニティ心理学的視座からのアプローチ　奈良大学大学院研究年報　13, 13－21

千原美重子（2007）学校教育における心の問題への対応（Ⅱ）－学校臨床心理士の活動に対する学校における課題意識の分析－総合研究所所報、15, 49－57

千原美重子（2007）学校臨床心理学へのアプローチ　奈良大学大学院研究年報　12、21－30

千原美重子（2007）学校教育における心の問題への対応（Ⅰ）－学校臨床心理士の活動に関する考察－総合研究所所報　14、19－28

村瀬嘉代子（2008）スクールカウンセラーの課題　村山正治編　臨床心理士によるスクールカウンセリングの実際　至文堂　135-138

村山正治（2008）臨床心理士によるスクールカウンセリングの実際　至文堂